

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働者状態

The Labour Year Book of Japan special ed.

第四編 労働強化と労働災害

第一章 強制労働と労働強化

第四節 戦時下の事務所

一九四二年九月、大政翼賛会の第十調査委員会(労務に関する事項を審議する)は、「女子労務供出対策」について、次のように総裁あて報告した。すなわち「現下の緊迫せる情勢下に於て殊に男子労力の不足甚しき状況に鑑み大政翼賛会に於ては一般的労務供出運動の一翼として強力に女子皆労運動を展開し、特に直接国防に必要な生産部面への動員を促すべし」と(大政翼賛会「調査委員会報告書」二〇七ページ)。

右のような情勢であったから、銀行・商社などの事務所は、婦人労働者が主力を占めるのが当然のなりゆきであった。日本銀行の行員たちが、「職場の歴史」を書く運動のなかで、次のような手記をまとめている。

昭和十二年には中日戦争がはじまり、インフレは進み、お札が増発され、出納局の鑑定課では、女子室が新設されました。女子の採用は急増しました。予算の増嵩、国債の発行増加等、国債、証券、国庫とあちこちで、女子の仕事は増える一方だったのです。お昼休みには、行員さん達から、戦況の説明や皇軍の戦果の報告等、お話をみんなで聞いたものです。給食のおひるはすでにパンでした。帰り途、アンミツを喰べるのも流行の一つでしたが、まもなくそのアンミツが喰べられないようになったのです。

戦争は日に日に拡大して北へ南へ、太平洋の島々へと、銀行からも沢山の陸海空の戦士を送り出しました。守衛長の万歳で歓送しました。新入男子は、顔も出さずにそのまま入隊してしまうのでした。男の人がグングンヘリました。年配の人と女子だけが、暖房のなくなったつめたい石の建物に残されました。鑑定課では、重い硬貨袋も女子が運びました。兌換箱を積み降ろし、警報がなると現金を全部四階から地下の金庫へ運び降ろしました。何貫匁もある証券を背負って待避する日を繰り返しました。お札の引取りにゆくトラックに積んだ荒木箱の上にモンペに色褪せた宮廷服をきた女の人の姿がみられました。荒縄とカナズチを持った発券の人達の手は荒れていました。国庫や国債では、係長と次席位が男で、照会文なども皆女が書き、教わる人もないまま自分のカンで処理し、こなしていました。分散疎開した仕事のために出張もしました。代理店検査にも行きました。

十八年十二月には、五十名の挺身隊員、跡見高女の卒業生が各職場に入り、徴用のがれのための縁故者など、常時入行者がある反面、疎開や罹災のため退職する人も多く、落ち着かない、はかないほどの人の往来でした。それらの人を退めさせないために、銀行では女子寮を建てたり、疎開先の支店へ転勤させたりしました。その頃、[女子の]年長者に“カントク”という辞令が出され、身分的な面で待遇しました。四年勤続位で“トクタイ”という肩書をいただいたりしたのですが、お給料は相変わらずでした。

毎朝仕事はじめに海軍体操をやり、大詔奉戴日には集会室に並び、又女子青年隊が組織され、近所の小学校で分隊行進などをやったり、救護訓練までやりました。十九年十二月には、学徒報国隊が鑑定室に入り、回収アルミ貨を選別して、飛行機増産のために働きました。その反面、銀行から軍需工場へ集団徴用で行かされたのでした。

空襲がひどくなると、出勤状態は急速に悪くなりました。大空襲のあった三月十日の後では、出勤しない人の生死を訪ねて、黒こげて煙のくすぶる道を、何時間もテクテク探しに行ったりしました。暗くたれこめ、ひと気の乏しくなった東京の焼跡で、灰を吹く風のなかを、電車さえ停った、艦載機の爆音の下の地面をはって、防空頭巾の中で汗ビショリになりながら毎日通った人たち、女の人には能力を出しました。中央銀行の窓口が、一日だって開かなかつた日はなかつたのです。

八月十五日、苦しかった戦争は終わりました。そして、女の人達はたくさんのもを失っていましたが、唯、仕事を、大きく遠くまで手をのばして自分の机の上で充分に処理したその経験を、得たのでした(銀行労働研究会「ひろば」一九五六年十一月一五日号)。

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働者状態

発行 1964年

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 東洋経済新報社

2000年2月22日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働者状態【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
